



^ 13
3245
2



門へ 13
號 3245
巻 2

野有虎の
舌

村田屋日

加蓋
其

御樹無海
は

雲
雲

昭和十年
七月九日
購

松添情史秋七草卷之二

東都

曲亭馬琴編次

禁
業

第三芒花

波のうた 敷浪草

めり世間人のそり定りまると。その人の自方も。人への忽地は仇とるうら。
り赤坂の城兵ホグを變じし。南朝へ多るたりや。と階とく山魚
氏清へ。俄頃又古市を進發して。赤坂の城を守り。城兵ホを慰
問し。正儀の亡骸を葬らし。とるふ。老兵ホのかとる。氏清は
ちうと命う。前夜使者及び。捕氏相傳の兵書。櫻井の一軸を
進し。せよ。と宣ひ。せが。件の兵書ハ。正儀自叙の。既ふ紛失。あ
ふ近臣百濟右馬の太郎が盗とる。逐電あるる。輝の顔

八十八卷

審み聞食くど在る。と云々。信ざらざる。と云々。氏清は
 眉を頻りめ。あつ意ゆぬ。前夜家録し。件の兵書を定め
 せらる。そのめい。打粉し。来つ。年の齡は。つむ
 しくあり。と云々。老兵ゆ。疑ひ惑ひ。彼人内へ入ら。楚と
 へんとゆゆり。尾尾宅の馬ふ。主の狩倉の打粉し。役者
 とも俱せ。一騎。年ふ。濕篠の弓の握太。背ふ
 獵箭を負。腰ふ。麋鹿の。勝をせ。その声音を。く
 年の齡。四十。年。物。耳熟。人の
 あり。といふ。氏清。怪。沈吟。千。破の城の間
 者。和。彼。城。中。入。し
 へ。右。太。郎。と。中。が。搦。井。の。一。袖

を盗と去。豫。正勝。兄。弟。和。田。正。武。志。を。ふ。て
 の。油。断。と。預。諭。し。頻。驚。嘆。か。て。諸。方。の
 手。配。し。城。中。を。巡。り。交。野。の。城。を。守。る。善。高。へ。謀
 め。防。禦。等。閑。ろ。ろ。結。分。両。頭。を。百。濟。右。衛。門。太。郎。茂。包
 へ。主。君。正。俊。の。遺。命。を。搦。井。の。巻。袖。を。懐。み。赤。坂。の。城。中。を
 脱。出。す。小。深。の。山。里。に。宿。を。投。め。笠。を。深。く。し。て。千。劍。破。の。城。下
 へ。赴。た。正。勝。へ。奉。公。を。求。る。外。化。を。し。十。月。某。日。正
 俊。の。放。光。忌。に。正。勝。正。元。の。び。す。城。外。に。香。花。院。を。詣。り。亡。入。の
 追。薦。町。噂。を。傳。へ。右。衛。門。太。郎。の。竊。に。欺。び。の。日。の。中
 へ。正。勝。二。尺。一。馬。の。尾。筒。を。携。り。君。臣。の。義。を。締。む。遺
 命。を。告。ぐ。と。只。言。を。必。定。め。太。刀。衣。裳。を。も。の。

打扮つ。朝中も死に旅宿をもち出陣の寺も来た。大門の
徘徊し。今行くときも雨は。正勝も正元も
猪木もあつた。親もあつた。正勝の南朝のふん歌となつた。あつた。あつた。あつた。
憚りく。素續し。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
日の照く。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
似たり。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
僑居も。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
こそゆ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
よ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
小翠。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

雨にぬべ。雨の袖と巻揚つ。袴の袴高くさうさう。直まよこし。雨風雨
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
吹断。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

公衆書史巻之二

千石
色
松濤情史
横巻を
兵書の
巻



本間孫四郎門人
阿多利伊太郎
楓 取美佐吾
延元三年
三月吉日

石ノ入本郎



このひ 間諜の秘を裁り。かぐろの奥書を見よ。

増補越後名寄 卷四菅名庄龍 谷山徳先守乃 徐下正成の遺 書とのせき伝ま 築堂ハ捕別官正 成の末男幼年の 出家よりこの 遺書と濯巻布 をこの寺よまひ 濯巻物ハ田福 一と今のま又體 のま存とまま 眞蹟ありとあり 又吉野拾遺の のまらとまらこれ ふうま一但兩三 字つゝの楷誤あり 弁せく儀あり

此の度集人又我の九子我等 家法を覺の貴局成と云量 見承度ゆは義重の更経道 幼学急成とく後我木心中

此の度集人又我の九子我等 家法を覺の貴局成と云量 見承度ゆは義重の更経道 幼学急成とく後我木心中

観心寺吉野の如意 輪堂の中正成の 遺書の中あや同文 の尺牘せは懸残 たるこそましく 奇なり洗布乃 墨本も大うさ違 へば集めらる標出 せらる左のどし

建武三年正月廿日

捕五帛為

此の拾遺はこれに在るの 正形かあまなるとま由

此の度集人見りま 此の度集人見りま 此の度集人見りま

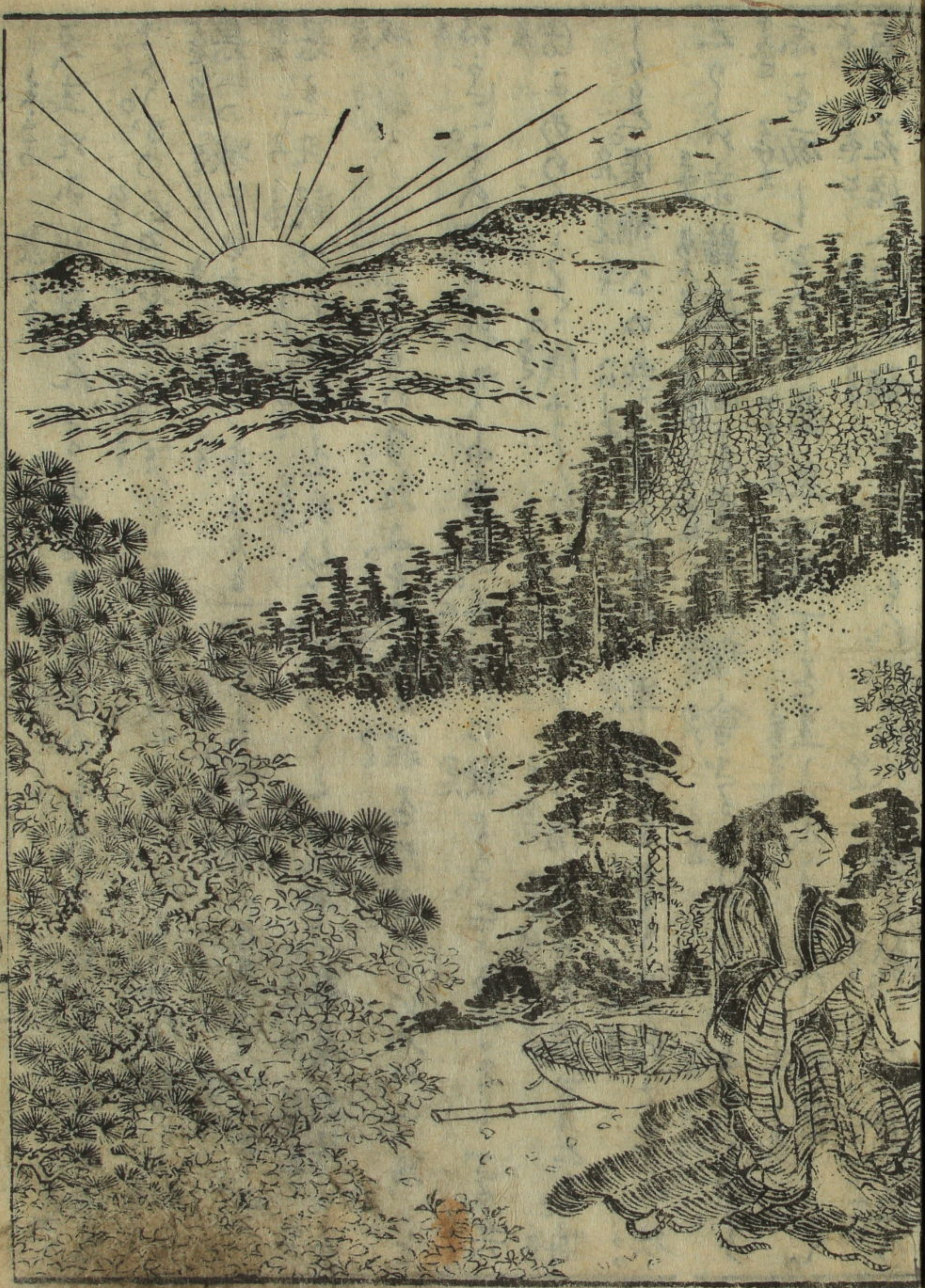
と流由をわらむ。大に驚き。昔時先君揚州溪 河あり。討死の前日。揚井の驛より。嫡子正成に 故郷へ入り。お母をりとかくやありらん再々老堂 集人をりり。遺書は紀念の二種をとり流し 贈りまると。又の物語は使るは是なり。まらんは 其の巻軸ハ揚井の兵書あり。伴の武士ハ改ら

義重の遺書

義重の遺書

憤は堪ねども。彼ハ久しく和田正武と仕く。龍泉の城中ハ内ハ兼
 換らまはる巻軸を。そり復えんを容易と思ふ。かく謀りて
 その日ハいさゝやと旅宿と立ぬり。難居兵隊一迎つづん。方便ゆふ
 とも。起さぬふひ。臥して慮ひ。頻り首を病どる。名のとつて
 兵隊を怒らぬ。そり龍泉の城外ハ起臥し。その出居を張る。彼を
 怒る捷徑る。とややと針畧と定め。俄頃ハ旅宿とあけし。
 面みの漆を塗り。いさぎを窺し。才より拷の蔽衣を被て。野臥
 の乞食と打扮。龍泉の城下ハ到り。並木の松蔭ハ起臥し。さ
 其の年も空しく暮ら。春も三月のらり。九百日のやうを
 彈く。果しく城中の奴隸ども。あさひ夕る。出入りする毎も。これ
 を憐る。食の飼り。魚の餒る。あれば。うるむは。りき出く。右

み食せり。右番の太郎ハ。の便宜を多し。右一日と難居る奴隸ハ
 對ひ。かのさくくの。殿さるの庇を棄る。露の命を懸け。あ
 らうる。使倥倥。和田どの。内のみ。難居兵隊と。あさひ夕る。あ
 へ。うづ。晴ふる。を。豫く。かん。牙の。彼兵隊ぬ。使
 ろ。人。み。在。さ。ど。や。と。同。奴。疑。答。る。が。は。か。り。さ。人。よ。の。ん。
 汝。か。り。い。て。當。家。の。老。臣。ま。お。れ。中。難。居。ぬ。ら。れ。て。主。を。教。ひ。
 下。を。憐。る。み。入。る。城。主。ハ。寵。ら。る。僚。友。も。善。く。ま。し。く。あ。ら。う。
 故。ゆ。や。り。去。年。の。秋。階。び。赤。坂。の。城。へ。更。加。り。入。る。と。忽。ち。
 發。覺。是。罪。科。脫。ま。が。う。あ。り。ひ。も。ひ。も。ん。その。夜。さ。り。透。電。て。合。し。
 在。如。を。さ。せ。ど。内。室。ハ。城。主。の。息。女。の。如。く。在。ら。る。か。れ。
 と。母。を。許。さん。と。残。る。す。る。と。其。の。餘。の。あ。の。養。猫。



譜
下
日

色
色

色
色

又此地に追放されざるを惜まざるの事ありけり。さんんはこそ汝ホ
 中ぐ。かの人の名は傳せり。あつりしやあつらん。律審より回春
 果一の城戸の方へ去り去り去り。右はつ太郎は是れを咄く。かつ
 果は且疑ひ。大い子をも失ひて。ほろぐとあやや。難居兵衛が赤
 坂の城へ文加するものあり。その故は罪をせりといふ。その後、こ
 れが。その事なれぬ。由は是。去年の秋より。さあをさる。兵
 衛はありんと。浅き打おし。可惜月日と過す。悔
 しく。渠楠公の兵書をせり。軍學をりく生活とせん。後
 へ。くが京難波の間を素ん。環會するものあり。じと。さう
 志を勵し。その夜龍泉の城下を去。人をもた。移装し。一
 直は花洛へ赴き。類をりく。その人を殺し。幾と。剣法乃

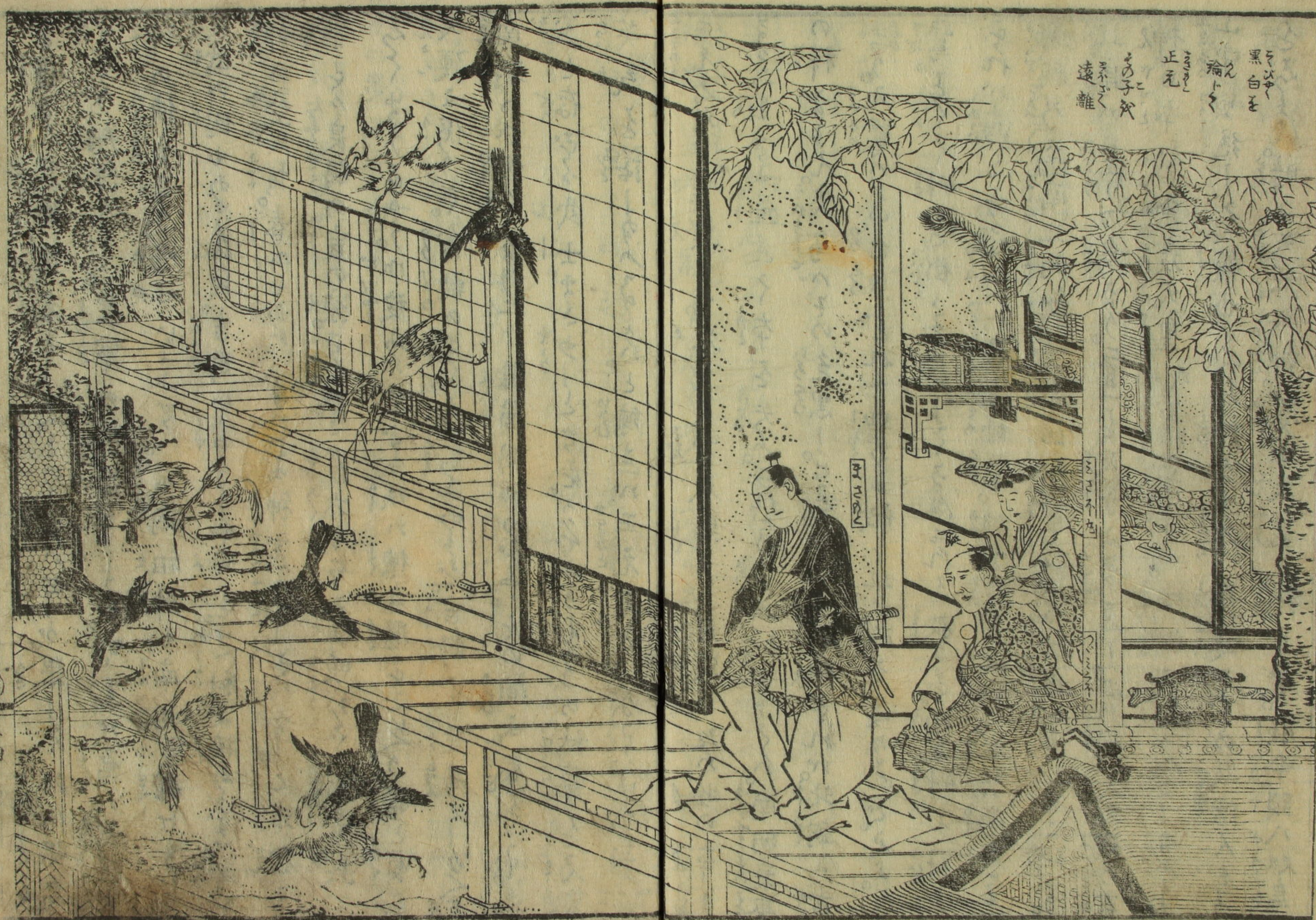
師範し。活業とし。是首は一年。彼首は二年。長明が移居車
 の進追ふ。かす。如く住居せ。京難波堀えん。定く五歳
 内より熱鬧場へ。かす。移居せ。その。毎又弟子由
 離し。武藝の人。又勝れん。又單を。去年よ
 今茲は。貪し。案下某生再脱楠左工門
 尉正勝の才。河内二郎正元。河内守は。赤坂の城中を
 自叙の。伝せり。哀感は。世の
 た。往時鳥羽院の時。天仁元年。あは。源為
 美の。叙は。保元の擾乱。あは。後
 その子。是勅命。己。後
 殘論を脱。悲し。胞兄守。祖正成の送別。身を。顧

公

扱く翔去うぞ正えらまを目送るて大に怪しむ。公の中いふ安き
 ぞ。雅らあきくと呼らるまは。右美らまよさうとぬと。今茲僅
 四才より。正えの嫡男。標丸をのき抱え。ほくら近く集るぬ。
 ろ右美の楠。普代の老黨。姓の津積氏。字産六と。つぎまて。
 ちのへら操丸の乳母夫より。年の齡ハ四十のふを。六ツ七ツ。ちん
 だん。妻の近曾。子よりまよと。ふををりて。愁ひと
 せど。君をよみ。自とあり。驚く。そのあやう。後。肩と
 比ぶ。り。當下正えの津積。有美をえ。り。り。産六は由
 今の怪異。をやえつ。同。産六。産六。鳥の鳴。戸
 置。郎君のえ。む。抱。進。校
 縁。初。さ。奇。と。

正えまがく嗟嘆し。死。熟。目。逆。白。物の。本。色。
 る。黒。堅。本。を。失。られ。吉。凶。南。朝。衰。廢。
 の。祥。夫。鳥。の。色。黒。を。四。方。に。配。られ。北。朝。の。當。
 又。鷺。の。色。白。を。四。方。に。配。られ。西。の。を。冠。す。
 鷺。と。く。神。を。御。する。死。を。放。す。西。の。神。を。冠。す。
 され。萬。の。名。深。緋。草。物。を。深。紅。の。赤。の。南。方。に。
 南。朝。乃。至。南。北。兩。朝。の。年。の。争。ひ。其。の。勝。敗。を。示。す。似。たり。
 且。鳥。ハ。日。中。の。鳥。なり。を。天子。に。象。す。嘗。聞。人。の。代。の。首。
 神。日本。磐。余。天。皇。皇。軍。中。洲。に。赴。く。一。の。代。の。首。
 山中。嶮。絶。復。ゆる。乃。棲。建。その。跋。人。と。さ。
 を。時。天。照。大。神。夢。天。皇。又。列。多。今。頭。八。咫。鳥。

黒白を
輪とく
正元
その子
遠離



を遣さん。且郷道者として多とのさまはせしが。果しく以八咫鳥。
 空より翔降りく。皇軍の郷道せしや。ゆまは鳥ハ天照大
 神の使令なり。嗚呼いふせん。宗廟祖神也。南朝を捕けぬを
 天武の例もある。吉野の宮のうや世を。是利又挾めし。鄙と
 都の八重橋。春もあけりぬる。神意空よとぶる。と未幾を
 察する良將の言の察こそつ。産六也。そつは曉ゆ。慰るぬ且く
 天運は偽りく。禽獸のうくある。吉野を皇居として。天
 南朝の北領今も存二十餘箇國ゆりどや。その間よ志をよ。忠
 義を存ざる武士。ささけとせむ。スんごうむらうの妖孽をそん
 英気を落しぬる。と練は。正え再く。いなりかいはとらる。

陸奥

量るる。今より十二年の後南朝終は。絶たぬ。未まを推
 氏の子孫。生く残るもの。あえく。これいり。皆あま。汝ハ家よ。
 操丸とく抱き。とや當國を立去く。迹を埋め。國を編置し。
 世の景迹をえらう。陸奥也。新田前左少將。義宗の嫡男也。
 將負方。服屋式部。太補。義治の長男。右少將。義陸。又子
 あり。又鎮西也。菊池。武光。か子。肥後守。武政。征西將軍。宮
 を守護し。九洲は武威を振ふ。と。彼れハ。世を潜
 が。便宜の地あり。ゆまは。ゆまの子をり。化郷は。潜
 と人。忽地は疑ま。殘者の舌頭は。けらる。汝。國。漢
 り。操丸を。殺せ。それ。ゆま。練ありとく。

公家書

律審又耳緒バ。崖六々々々果て。次の日より。志のびく旅の用意を
 けし。河内國積良郡野崎の観音堂を守り生法師ハ。諒之。相
 識まるりのるんバ。さまを騙す。さか方人ト。律既よそのひぬ。さる程
 ふ八月も尽く。九月の上旬。有一日正えハ。津積崖六を呼びと
 ののやう。それ頃日ハ。又の喪よつりつをまへバ。推さりの。つれ後
 甚さく。汝操丸又俱く。抱山とせよ。小松山の茸狩るんどの。いと
 真めん。仰よまは。崖六うけものりく。重庵後三四人とす。ふ
 操丸又冊さく。奉えぬ山のらるる。小松岡又赴き。終日茸狩
 し。初ま主を慰む。操丸いといふ。あしげ。樹間立階を右よ
 左よと。漫移あゆみ。推ハ却く。足速く。動ゆれば崖六ホ
 も。遙又後つ。忽地又見失ひぬ。さんばらそとく。崖六ハ。さまよも

あらど。慌忙。ま里庵後りうとゆ。樹の蔭。叢の中ま。喚つ叫び
 つ。尋ね。雲の。新由り。日よ。向暮と。さく。さく。ゆあ。さま
 ありと。つりを。残せん。ゆ。ゆ。ひ。ひ。る。る。れ。重庵後。の。ま。る。ん。バ。非
 城中へ。走り。ぬり。く。律の。額。を。斬。ま。う。せ。う。が。正え。大。死。は。驚。た。患
 操丸が。失。う。と。く。生。死。ゆ。あ。ら。ど。さ。ま。己。ん。部。々。索。ね。ゆ。と
 い。た。さ。る。あ。ら。く。下。知。る。あ。ら。の。熟。る。老。黨。お。の。く。野。兵。を。お。く。
 前後の。城。戸。り。まり。出。通。宵。ら。る。火。索。る。よ。危。く。往。方。と。さ。ま
 ぶ。り。ら。り。

○第四 芒花より 袖振草

物ふり。交野の。原を。さけ。ゆ。け。が。袖。り。草。又。雉。子。啼。たり。

驚ま。いゝその心ひを焦らすん。燒野の雉子夜の鶴。峯の枝乃
 勝を彫。その悲をどすうさるん。捕正元の夫人ハ。和田正武の後方
 あり。支野前とやうよふや。いぬの日最愛の子操九耳狩し。往方
 志まぶるうみなるその日より。振くうみなる屋敷から志の袖が乾く
 間あり。神に祈り仏を念ふ。存命してよあさるうら。今一トとび。
 こが子よあつゝとく。歎きあふを理する。正元と。孫と。孫りし
 うるん。バ人めをうら。懶さあつちし。兄正勝よあつちし。龍泉
 の城へも。あつと告し。和田正武大さよ。驚れた。操九ハ。女督之
 彼僅よ四方るん。眼ごの凡常うらぬをえくも。ゆくとも。憑く
 おりひつるふ。失うるを安うらぬ。山魚氏清が所為あり。竊よ
 奪ひす。人質よらる。あつらん。間者を入と。赤坂の為

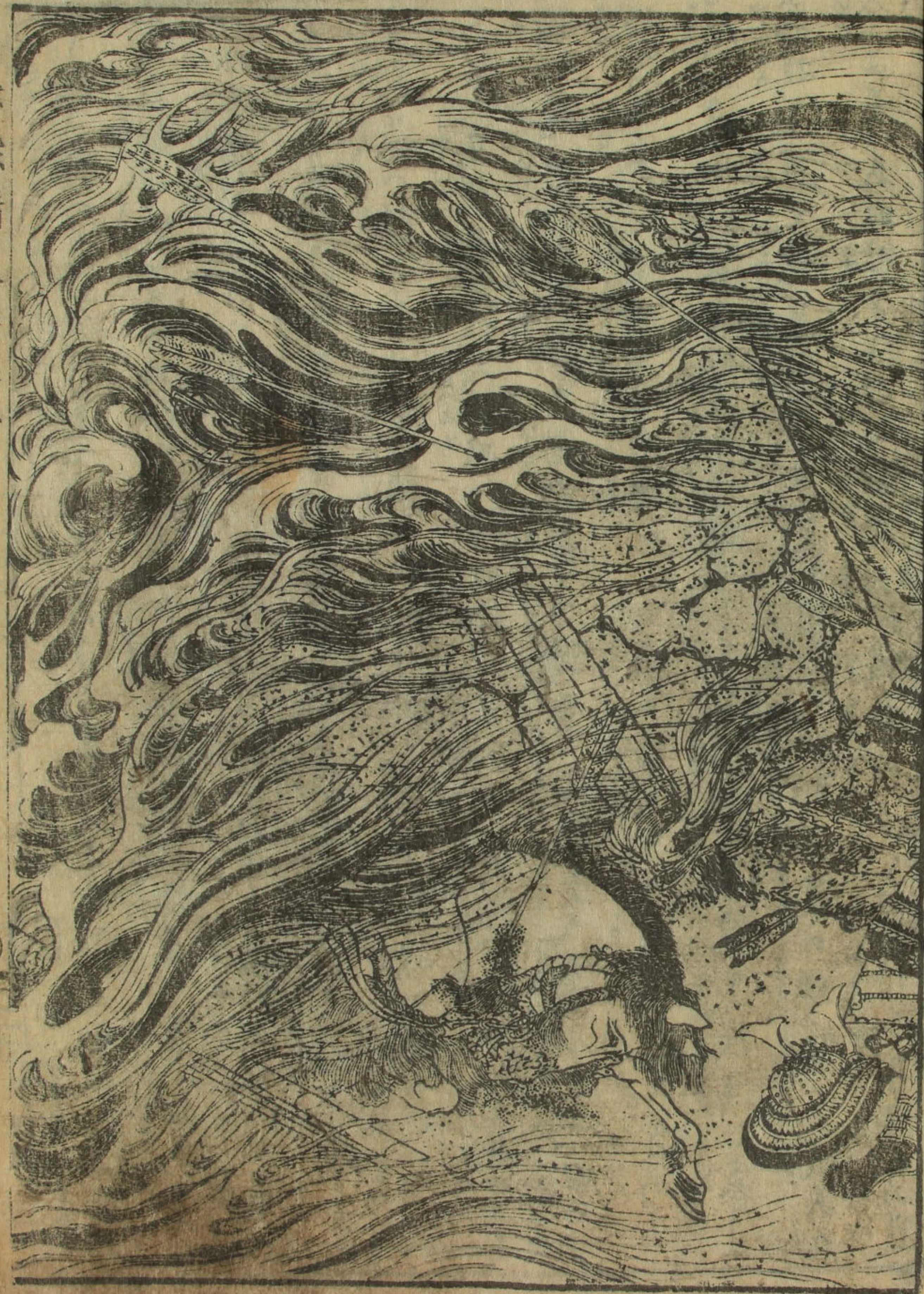
俵を張し。こが推量よ違ひ。そのもあつちし。その後とび。と
 回答し。さまぐ。又方便をめぐし。赤坂のやうを。探問よ。操九の
 在知終る。知るける。さまぐ。正勝の為あり。と。あつちし。の怪るん。遺憾
 不堪ぶ。童扈後を責罵り。汝ホハ。いひ。び。あつちし。と。津積窪
 六が。冊。あつちし。幼死主を失ひ。阿容と。あつちし。と。あつちし。
 い。ふ。そ。や。い。う。操九が。往方志まぶるん。かの窪六が。首を刎。その
 罪を正。さ。ま。ぐ。竹をり。不忠の士卒を懲ら。と。い。ま。ま。ぐ。と。
 正元。練。め。その。憤。某。よ。子。と。異。る。と。あ。窪六が。罪。持。ら
 ぶ。と。い。く。も。彼。が。首。を。刎。と。あ。失。う。る。こ。が。子。の。あ。ゆ。さ。あ。つ。ち。し。
 死刑を宥。追放ん。と。穂便の。沙汰。あ。つ。ち。し。と。あ。穂。便。と。窪
 六。を。追。放。と。皆。正。元。の。謀。畧。あ。つ。ち。し。畧。よ。窪六。よ。中。の。機。密。と

號 あき 九ノ。操丸の三月代托^{たの}せり。窪六ハ。毎月主の代系^{ついで}。野
 崎の観音^{くわんおん}又^{また}詣^よ堂守の生道^{なまぢ}云^いガ愚直^{ぐちゆく}。あつては^{あつては}竊^{ひそ}
 野崎^の又^{また}引^ひり。伴の法師^{ばんのほふし}を懸^かす。再世^{さいせい}の鹿^かを棄^すす。主家^{しゆけ}乃
 老臣^{らうしん}何^{なに}が子^こ。僅^{わずか}四^よ才^{さい}。繼母^{きぼ}の憎^{にく}み。人^{ひと}を^をと^とび^びおん
 と針^{はり}被^ひと既^も急^{いそ}る。子^この恩^{おん}人^{にん}の^の子^こ。救^{さく}ん^とお^りひ^まる
 牙^かむ^らふ^んも^もあ^まり^し。老^{らう}師^し。ふ^を為^をし^め彼^か稚^ち兒^にを^を奪^うす
 去^きる。志^しが^り操^{さう}し^を五^ご七^{しち}日^{にち}を^を経^へて^は。此^{こゝ}に^に恐^{おそ}バ
 ぶ^いし。元^{もと}來^{きた}愚^ぐ直^{ちゆく}の業^{ごう}門^{もん}を^を實^{じつ}する^は。深^{ふか}く
 憐^{あは}れ^た。慈^じ悲^ひハ^は佛^{ぶつ}の^の本^{ほん}願^{がん}する^は人^にを^を助^{たす}け^る。出家^{しゆけ}の^の推^{おし}辭^じは^はあ
 の^のね^ど。その^の兒^こを^を奪^うす^は。容^{ゆる}易^{やす}か^きト^と毛^けを^を吹^ふ疵^{きず}を^を求^{もと}め^ん
 其^{その}罪^{つみ}が^はり^し。此^{こゝ}に^に為^なる。と^と回^{かへ}答^{こたへ}つ。速^{すみ}に^に兼^{かね}け^る。窪^{くぼ}六^{ろく}を^をね^ん。

その^{その}る^るハ^ハ安^{やす}し。九^こ月^{げつ}某^かの日^{にち}。四^よ五^ご人^{にん}の^の重^{おも}さ^をり^し。件^{けん}の
 稚^ち兒^にを^をお^かす。奉^{たて}る^は山^{さん}の^の西^{せい}の^の因^{いん}。老^{らう}僧^{そう}の^の長^{ちやう}芽^げ萱^{げん}
 の^の中^{ちゆう}。く^くろ^ろひ^ひ居^ゐる。竊^{ひそ}に^に抱^{かか}る^は。一^{いつ}人^{にん}。侶^{りよ}を^を重^{おも}さ^をり^し
 志^しが^り経^{けい}。経^{けい}を^を妨^{たが}う。利^り経^{けい}を^を獲^と得^とる。老^{らう}師^しを^を連^{れん}係^{けい}
 三^{さん}日^{にち}。只^{ただ}兩^{りゆう}三^{さん}日^{にち}の日^{にち}と^と費^{つひ}す。其^{その}功^{くわう}德^{とく}莫^な大^{たい}する^は。と^と
 其^{その}後^{のち}。よ^よひ^ひに^にと^とり^し。法^{はふ}師^しハ^ハ遂^{つい}に^に賺^{せま}る^は。窪^{くぼ}六^{ろく}と^とお^もい^はす。
 其^{その}日^{にち}。干^{かん}劍^{けん}破^はを^を成^{じやう}す。本^{ほん}日^{にち}の^の暗^{あん}号^{ごう}を^を定^{ぢやう}め^す。朝^{あさ}に^に又^{また}小^{せう}松^{そう}が^が因^{いん}に^に
 到^{いた}る^は。叢^{そう}の^の中^{ちゆう}。牙^かを^を操^{さう}し^に。彼^か主^{しゆ}後^ごが^が茸^{しゆく}持^ぢる^は。張^{ちやう}ひ^ひを^を張^{ちやう}ひ^ひと^と扱^くる^は
 操^{さう}丸^{まる}を^を抱^{かか}る^は。通^{とう}骨^{こつ}徑^{けい}に^にま^まる^は。野^の崎^{さき}へ^へお^おか^かす^は。そ^その^の人^{にん}は^は
 窪^{くぼ}六^{ろく}が^が音^{おん}耗^{かう}を^を待^{まち}た^る。窪^{くぼ}六^{ろく}を^をし^して^は。罪^{つみ}を^を重^{おも}さ^をり^し。と^と
 劍^{けん}破^はの^の城^{じやう}を^を追^お放^{はな}せ^し。直^{ちやく}に^に野^の崎^{さき}に^に赴^{おもむ}く^は。件^{けん}の^の法^{はふ}師^しは^はう^うら^らに^に

武政が物敷布施し。郎君の久後を親世喜と祈致し。操丸を
 脊負ひつ。身を窶し望をふりし。藁りく暴む両刀もさう
 往方を定めり。旅路又迷ひ出たり。あ下は殆ど。かくと春
 さら春ぬり。又十二年の光陰を跨るやど。いぬの意安七年
 南朝元 十月の菊地武政茂満將軍又攻るやまを。且く和睦し
 中三年 其の英気を遊る向如くの城を守りて。ぬらひ九州を討後んと
 ころのど。武政が武威ありと衰く。終は志を為果すと。明德
 二年 龍泉の城主和田正武才よりぬ。享年五十四
 中八年 ありし程不河内の國人悉く叛き。足利家へ属せしむ。
 今の千劔破の城を残り。正勝正元らるるをくり。勇しといども。
 赤松紫竹山の太軍は火攻りし。兄弟後兵。あまは残り。自

方の兵士悉く討盡し。捕兄才ハ。不ひ残又必死を脱し。正勝ハ
 犯路を投ぐ。没落し。十津川は漂泊し。彼如く才よりぬ。叔
 正元ハ只一騎。二の城戸は立塞り。一詰齊結。その敵を討く
 詰し。その身も薄瘠。敵筒如負より。今ハ是す。とひり。さら
 猛火の下を。つと。屠り。技く。煙は。噓く。立退り。夫人交野前と。和田
 正武の息女秋野姫を救ひ出。後門より。去り。去り。秋野姫の
 乳母豊浦の。只。秋野姫の。去り。去り。秋野姫の
 武世を遊。孤と。り。よ。け。正元。小。憐。乳母。あり。と。千
 劔破の城へ。遊。夫婦。を。慈。実の女見。異。の。姓
 今茲ハ。十四。容止の婢。婿。以。子。の。操丸



妻子を
扶引て
正元
大和路へ
走る



おのれ世様

ゆきの

とら

既二親の年を修まどむ。世よありともありとも。皆えど。片時の志を
 ぐらえ親の歎きよあひらうか。幸なれりの姫ありなり。推さるるは
 母を喪ひ。去才の養ふ。死別は四寸のとれり。結髪く。今茲の
 十五よりより。夫の顔もえもあらず。さるるをくくを。おぼさるるを。
 交野前へ殊さうよ。愛慈をひひか。かくの千劔破の城さく攻落
 されく。主後只四人。大和路へつり入る。吉野の皇居。あまんとて。昼を
 樹の蔭。岩の挟。牙を潜め。夜と通霄路を去り。幸しく六田の山
 里やを来つ。日正えの夫。瘡あひの外。又瘡あき。苦惱いんべり。由あり
 ざりし。か。かくて。吉野へまう。が。と。杉木挽りの。只独住む家り
 宿投く。且く保養あうけけ。差夫。深枯得喪の理。誰うの脱せん。
 今よ。あぬ。世うれども。楠公成の誠忠。死しく。且。折む。子孫の選

利を守り。父子三代。五十餘年。河内半國をり。安利
 大軍を防ぎ。戦ふ。とりども。水固く。船行ど。城敗ま。人守り。が。じ。
 され。正勝。兄才。千劔。破を。没落。く。南朝。あ。股肱。の。武臣。を
 失ひ。君臣。忽地。鯁。離。水母。の。進退。究。く。さ。ま。あ。ひ
 へ。あ。人。お。し。由。あ。且。一。京。都。将。軍。義。満。り。大。内。義。弘。六。南。滿。高。と
 あり。さ。ま。く。と。賺。し。あ。り。う。が。後。小。松。院。を。以。糧。君。の。義。あ。七。南。北
 朝。和。睦。と。の。ひ。と。年。北。朝。明。徳。三。年。南。朝。建。隆。三。年。閏。十。月。二。日。南。帝。入。洛。あ。り。く。
 嵯峨の大學寺。著御。す。く。同。月。の。五。日。三。種。の。神。器。を。渡。さ。ま
 あり。か。か。く。太。上。天。皇。の。号。号。を。さ。ま。り。後。龜。山。院。と。を。あ。り。し。る。
 延元二年。後醍醐天皇。吉野へ。遷幸。あり。し。り。五十五年。足利治乱。起。五十六
 年。ふ。く。南。北。兩。朝。の。合。辨。あり。し。り。大。日。靈。貴。の。神。を。あ。り。し。り。稱。せ

中へ入る。さうして捕行内二郎正えへ。前渡やうやくは愈もなれば。
 まぐ吉野の皇居へやまよん。警残る兵士を招集せよ。千
 劍破の城をさり復せん。とぞ入り。南北朝の合戦あり。南帝
 入洛し。人々と風声なる。忽ち胸塞り。絆のやうを定むれば。
 実るもの。こゝそものうみ。仰天。さひしとも化となり。死す外
 なく。ある日正え。あつたの男が薪樵は出く。備は人のま
 ど。海渡りのやあつと。豊浦は出居のつら守り。文野前と秋
 野姫は對ひ。声を低し。さうも主上の天運のふれとさう。秋
 や。ゆらゆら。入洛す。是非をさうさうひる。あつとも
 足利家ハ千鈞の懸る。密に花洛は赴き。美満を担ぎ。ん。
 汝達の婦人のさう。や捕か妻子と。さうとも。命をさう。

と。あつ。そのかく。一生をさう。さう。いひも果。怒。

眼より。只一滴の涙の玉も。砕る胸。うさ。あつ。

やつ。土後。か。面を。つら。縮舟の。あつ。

身を。文野前。の。押。君の。仇。自。

仇を。狙。んと。宣。を。維。の。禁。め。さ。あつ。

満。威。勢。ハ。傳。く。六。十。餘。州。を。掌。握。し。て。復。初。の
 出。居。中。前。を。後。に。隨。ふ。後。者。ハ。洛。の。小。路。中。あ。つ。

怒。ん。と。あ。つ。六。の。臂。兩。の。翼。ハ。生。出。る。と。も。さ。う。あ。つ。

する。不。馬。さ。つ。武。士。の。子。と。生。ま。武。士。の。妻。と。さ。う。あ。つ。

う。は。羞。く。あ。つ。さ。う。あ。つ。怒。ハ。存。命。す。ゆ。さ。の。物。を。あ。つ。

う。真。氏。と。さ。う。か。公。標。は。中。の。芳。さ。う。あ。つ。

胸さうほりぬれ。俯め人か。是のどせう秋野姫豊浦りうとも左古
 よう。抱き起さか漬る。鮮血よりとさめぬ。新婦と乳母か涙の
 雨憂みの虫とさく音え。さくの枝ハるりけり。文野前ハ息の下
 秋野姫をええりて。うたえぬ身の殊さとも。落人ともりぬを。
 ちうらちちちちちちちちちち。嫁姑を睦す。下賤の常言す。
 りれい送の落命。増えく世は憚る。惜すれく死ぬ人の死
 ちり際りるれ玉椿の八千代ませもとありひ子は。耦さるりぬれ
 嫁前前の歎ゆい痛すくまど。さか牙夫は先づらて。後か
 茂満を。登り進せんとも人の。中よ豊浦乳母ハ母はとと
 心。杖ともり。楯ともなり。秋野姫を守り冊さ。浦の首
 屋に起臥し。山の幸雄は牙のともとも。夢この名を由阿翁り

名を名を名を。書丹より。さくの廣葉よ世を扱。火打水
 汲そ新熊。人の奴と牙をさりて。さろ誠よりひさば。神も
 守り佛の憐れ。幾時かあらん。化る縁よ。締よ。三才の
 とれり。寡婦の名を。あひつ負せ。因果どら。さるりて。か
 集合え。脱とく。えの過世の業報。苦しめり。ハ今生の契りよ
 こそ。さく口説。吉由細。霜夜の虫の。憑こさ。けり。ええい。は
 いさ。あけれ。秋野姫。さか牙の。秋の。心。さ野の。鹿乃
 夢の世と。ありひ。絶さ。ゆ。ね。峯の。落葉の。うら。ぬ。か。歎
 を。せ。る。れ。空の。親と。見。す。わ。ら。る。その。二。柱。よ。捨。る。と。さ。く。さ。の。ひ。は
 竹と。さ。る。り。ん。ん。形。る。れ。世。よ。残。ら。ん。よ。り。ろ。と。も。よ。伴。ひ。ぬ。死
 出。の。山。路。の。驕。さ。も。三。途。の。川。の。筏。と。も。さ。り。て。渡。さ。ば。孝。終。の。え。い。や

あつんと忙しく。彼の囊は玉の緒の魂銷又由名ふの似ぬ。獲刃刀
 を抜出せば。豊浦の吐嗟と推し。扇夏は通るく作らるや。乱れ
 るの欵。苧環の。うすくは。うすくは。死んとい。いと理多くを侍らる。結髪
 中しくする。殿さふん。往方らそと。まね。世より人とも。ゆえぬ。め
 を存命く。坐さる。孰の命り。彼君。環會んと。ふ。は。や。ん。
 苑も標も。十久。その。含を。そん。多。散せ。と。姉の。自害。ま。の。ん。や。堪
 ぐた。と。を。忍。び。の。ぬ。ね。ば。孝。も。侍。も。ど。負。の。ゆ。と。い。ひ。が。ひ。は。と。練。も。も。れ。ゆ
 吾常の名。又。御音。く。豊浦の寺の。薩。も。と。で。さ。ゆ。は。涙。よ。ら。ま。の。声。外
 へ。漏。さ。す。せ。と。と。さ。う。や。刀。を。川。放。せ。ば。交野。前。の。喜。い。げ。い。
 点。改。の。と。あ。く。物。い。ぬ。苦。痛。さ。そ。と。ふ。り。ひ。や。り。正。元。頼。し。嘆。息
 一。扇。笏。よ。ろ。く。小。膝。を。と。め。死。を。懲。く。く。夫。を。励。と。交野。か

知烈。の。ろ。く。も。は。死。ん。と。秋。野。か。孝。然。め。く。く。ら。そ。正。元。が。妻。と。も
 い。ぬ。嫁。と。も。い。ぬ。あ。十。二。年。か。間。兄。正。勝。も。も。昔。ど。く。く。深。く。掘
 ぶ。つ。か。子。の。往。方。自。今。審。ま。り。の。考。も。ん。そ。と。を。真。土。の。銭。別。よ
 ら。け。結。く。清。果。よ。赴。さ。り。人。抑。い。ぬ。天。授。三。年。正。元。へ。正。元。亦。坂。あ。と
 自。叙。し。の。ひ。う。ろ。ろ。千。劔。破。の。城。の。前。裁。あ。く。鳥。と。鷲。と。挑。ま。ま
 ひ。死。し。る。警。の。と。と。く。十。二。枚。十。二。箇。年。の。今。茲。又。當。く。南。朝。傾
 廢。の。祥。を。示。と。と。豫。し。と。も。曉。る。か。人。よ。い。づ。れ。い。ゆ。ス。ぐ。捕
 氏。の。子。孫。そ。又。断。絶。せ。ん。の。歎。ハ。と。ま。老。黨。津。積。窪。六。百
 幾。よ。謀。を。授。く。ま。づ。操。丸。を。失。ひ。つ。と。い。ぬ。せ。そ。れ。を。裁。度。の。産
 を。追。放。せ。り。人。と。ま。む。子。を。遠。離。彼。穴。窪。六。又。久。後。を。托。ら。る。の
 而。ん。ば。る。く。そ。ゆ。と。と。づ。れ。兄。正。勝。と。和。田。正。武。の。公。は。く。一。交野。か



歎由痛しけほど。兵々筑道ありとり。謀の密なるをすしとと。
 痺ハ曳易れを憚りく。々々中をひのさうり。これ恩愛又慈憫也。
 この子の栄達を必し又あつと。秋野姫由あくるを望みしを。つかはせ
 ハ時を忍びく。えを敵と扱るとも。操丸は又世とあつて。年を経
 義兵を起し。又か志を続ぐ。仇を滅せしめりやあつん。と心孝よ。の
 ころ。止がうて。親族妻子より年外り。その歎を被しるあり。初ハ
 思慮す。又違ひ。兄ハ紀路へ没落し。これハ花洛へ死よ。ゆく千枝の
 常葉も枯くよ。一樹残す。操丸ハ在知を索く。環會夫婦全聚る
 よの。うたや。由あつと。あつと。秋野姫ハ大和根津の間。又世を潜び。
 時の到り。又等待く。産屋よ偽る。分境の契も空しく。送よ
 面を怒り。とくも。操丸ハ獲り。囊あり。野崎の親世。又目と擬し。

今や。秋野姫あり。志紀の田比沙門天の小像を
 見る。祖又正成。幼稚より。ふく信。く。慈験。よ。ハ
 夫婦再會の割符あり。これよ
 法華経普門品の要文。又。禮拜供養
 觀世音菩薩。便生福德智慧男。設欲求女。使生端
 正。有相女。宿植德本。衆人愛敬。と。鏡のひ。又賢愚
 經の。有優婆夷誦經。毘沙門天從空而遇。乃曰。姉
 妹。我。与。汝。宝。物。可。請。舍。利。弗。奔。當。得。勝。福。と。鏡
 の。及。智。の。及。バ。る。と。ろ。の。人。の。才。を。借。べ。い。人。力。の。及。バ。る。
 神佛の冥助を仰ぐ。豊浦ハ雄。こ。死。公。操。の
 秋野姫を扶掖。主役。く。刃。を。窺。し。法。隆。寺。

のめくそ落よ。彼寺ハ。捕氏ハ舊好あり。密ニ住持ハ憑
 穿えろりバ。ふらりの隠家とゆふりぬべし。こまきる逆の峯入
 せし。山伏ハ打扮す。直ハ奉洛へありしをらん。らるる
 や。と急彼又。現示し。項ハ被さる。獲身囊をこり外し。
 秋野姫よりまを授け。ま軍要ハ貯録され。金二包と
 らし出く。らまをを豊浦ハ通ふらり。秋野姫主後ハ。此
 めく縁由をさす。ありがたやぐ。赤く。世ハ憑し。おお
 さまこと。互ハ怒りぬ。操九ハ。あ日をいつと定めり。人乃
 命ハ槿苑の夕をす。ぬ姑中前。せえく存命あり。ひるが名告
 あふらとが由ありん。今とらりて。いなる海。奉意多。別
 へぶるら。おらるる実ハ。りらり。と呼活ら。ま。交野前。

中ノサくみ眼を閃れ。輝のやうのさくさくぬ。今般又とらるる。こら子
 の存亡。その物指。千僧の。流経。ま。罪うた。迷ふの雲を吹
 らし。驚の言。峯へ。帰ら。花。吉野と。いハ紙雞の。夫婦が。手
 末期の水と。乃受ぬ。ら。の遺憾と。いハ。羊ハ唇を。動と。んえく
 輝断と。覚。おの。去て。堪。声ハ。は。眼ハ。は。男。あ。ト。ガ
 ぬ。便。と。所。乳母。袖。千。破。を。出。神。月。六
 田の山川水。落。石。名。を。書。亡。塊。を。導。た。人。救。世。圓。通
 煩悩。菩。提。種。と。門。天。教。の。宝。ハ。眼。前。男。の。情。を。か。載。く。
 路費。物。ハ。缺。け。も。世。を。濁。が。旅。と。死。出。の。旅。道。一。美。ま。
 前途ハ。経。帷。子。ハ。禪。衣。ハ。髪。と。兜。巾。の。假。山。伏。女。道。者。の
 り。回。向。旅。の。ら。ら。由。ハ。襦。袢。の。襦。少。ハ。あ。亡。體。を。笠。

く
隠く冬枯。芒花が末の野葬。哀まてんふ。さ
る。

松濤情史秋七草卷之二終



